

老いの一途

大久保房男 『日本語への文士の心構え』

古屋健二

懐しい匂いがし、郷愁をさそう一冊である。幼いとき、蔵から秘蔵の和本をそつと持ち出すと、きまってこんな香が鼻をついた。

古紙がたてる埃臭さに紛れて、長い年月ひめられてきた秘密がかなかな色香を放ち、誘っている気がして、本をひもとくまえから胸が高鳴るのを覚えた。本書を前にして、ぼくはそんな小学生時代に戻った錯覚を抱いた。解せない話である。というのも、小学生のぼくが目にしてしたのはほとんどが江戸末期の春本なので、こちこちに硬派の本書とは逆な天地のはずだからである。しかし、なんと言わ

れようと、まなじり決した本書が小学校時代に貪り読んだちゃらんぼらん悪書とつながったのは事実である。意外なつながりだけに、この一瞬の錯乱にしばらくこたわりた

い。こじつけに聞えるかもしれないが、生真面目な本書も不真面目な歌派の書も、偏見なくみれば、ともに同じ構成、同じ語り手からできあがっている。廓本が江戸の不夜城、吉原の内幕を通の目で暴いてみせるのと同様に、本書はわが国のバルナス、文壇の真髓を事情に通じた老編集者の立場から明らかにしてい

く。ともに青年垂涎の別世界を開いてみせ、そこに至る階段を具体的に指し示し、歩き方まで親切に伝授する。両書ともすぐれた入門書、案内記、秘伝書なのである。しかも、吉原も文壇もいまは消滅した過去の遺産なので、生なましい欲望、野望のうごめきを活写しながら、両書とも憧れの夢物語といったロマン的美しさを併せもつ。

こんな風に書くと、遊郭と文壇とをこつちやにするとは不謹慎極まりないと一喝されそうだが、そういう硬骨漢には、文士の心構えとともに、たとえば洒落本の代表作、遊子方言を並べて読んでいただきたい。両者の語り口があまりにそっくりなので、思わず苦笑されるのではないだろうか。遊子も文士も酸いも甘いも噛み分けた苦勞人で、遊子が当節の若いものは女のあしらいをまるで知らないと呆れ顔なら、文士は近頃の文学青年は日本語がおかしいとしきりに嘆く。ふたりとも猥雑に乱れた時代に顔をしかめ、ひとりとは失われた粹の極みを、いまひとり正しき日本語のあるべき姿をこ細かに説いて聞かせる。

このようにみえてくると、大久保房雄氏はぼくには大田南畝の生まれ変りにみえ、思いがけない親族に出会ったような親しみをつい覚

えてしまったのである。永井荷風もまた南畝こと蜀山人をことのほか好んでいた。荷風は小説家志望者のために小説作法を認め、遊び人には四畳半襖下張を供しているが、これも、世間一般で言われているように、引き裂かれた二重人格の表れではなく、文と色と道は異なるが、同じ求道の姿勢を貫いた結果の産物と考えられる。荷風は近代日本に憤り、絶望し、その苦しい思いを震える筆で表白しているが、そんな荷風の激情を支え、抑えている源は、世界でただひとつ絶対的な規範に律せられた正しく美しい国語、フランス語に対する傾倒だったような気がする。荷風は七十過ぎて原文でゾラ、モーパッサンをくりかえし読みつづけていたが、それはもはや楽しみの域を超え、修行、祈りに昇華していたはずである。

それにくらべ、大久保氏の義憤を培っているのは最盛期の文壇の空気を吸ったという自負と本ものの文士と真剣勝負で渡り合ったという誇りのように思われる。時代を代表する天才たちと係ってきたという自覚が氏の背筋をしゃんとさせ、面倒臭がらずに世の誤まりを正させている。氏の一途さはオンリーワンの現代では希少価値だが、ひと昔まえにはど

こへ行っても氏に劣らず純粹な一刻者が頑張っていた。中学生になって、ぼくは歌舞伎の立見に連日通ったが、そこで六代目に心酔していた故老と知り合った。老爺は音羽屋の芸がいかにか神技であったか、それに對し当代の人気役者海老サマがいかにか大根であるか、ひとつひとつ実例をあげて説いてくれた。ぼくはこの翁の仕方話で批評のおもしろさに目覚めた。同じころ、正直正太夫こと斎藤緑雨を知り、ときとして下世話にくだけるその論評を浮き浮きと楽しんでいて、本書の大久保氏はこれら真に触れた昔気質な見巧者の系譜に位置づけられると思う。

しかし、実のところ、本書の庄巻は、才能豊かな作家たちが身を削って創作に励む、ひたむきな姿勢を鬼気迫る筆で描き出した第四章にある。尾崎一雄が簡潔な表現を追求するあまり、約束した二百枚の長篇を百三十枚で完結させてしまう転末、高見順がああ饒舌体を原稿用紙が真黒になるまで推敲に推敲を重ねてしあげていく経緯など心うつ内実がつきつきと明かされていく。その果てのないたたきとりの闘いには息をのむばかりだが、ただ戦う文士は孤独ではあっても、孤立はしてない。互いの戦況を知り、互いの健闘を称

え合い、真の勇士と相互に尊重し合っている。この連帯意識こそ実は文壇の正体だと言って大過ないと思う。それはきびしく温かい同志関係だが、そのいまはなき凛としたつながりに浴するためにも、三田文学に筆をとる方がたはぜひ本書の第四章「正しく、美しく、強い文章——文士はどういう努力をして来たか」をくりかえし熟読して欲しい。言葉に對して並なみならぬ思い入れが芽ばえ、己の書く姿勢が定まってくるはずだからである。

本書を手にしたとき、実はぼくはどん底にいた。定年退職を機に公と関係を断ち、罪深い自分と向き合ってきたが、さいわい試作がいくつか形となり、大久保氏からほとんど書きなさいとエールを頂いたりした。軽薄なぼくは元鬼編集長の鼓舞に舞いあがり、腰を浮かしたままじゃんけん書き飛ばし、いい気になっていたが、とうとう先日、苦り切った編集者からこういうものは私のところへではなくクズ籠へどうぞと引導を渡されたのである。これにはさすがのぼくも三日間立ちあがれなかった。が、本書を読むにつれ、自分がどんなに甘く、迂闊であったか思い知った。本書は光であり、救いであった。

（アートデイズ・税込二六八〇円）